

## 「前の経験を忘れず、後の教訓とする」

—日本映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見て—

北京 趙 喜晨

最初に日本大使館がこのたび「嗚呼 満蒙開拓団」の観賞会に招いていただいたことにお礼を申し上げます。同時に羽田澄子さんほかこの映画を作られた関係者のご努力によって、このような血と涙の歴史的シーンを見せていただいたことに対して感謝しなければなりません。「嗚呼 満蒙開拓団」は、20世紀の1930、40年代にさかのぼって日本の開拓団の人達が中国東北地方でなめた悲惨な経歴を、間際で追求し記録したものであり、見た後、悲痛な思いをさせられます。

「前の経験を忘れることなく、今後の戒めとする」後続く世代に歴史を理解させることは私たちの責任です。この映画は大変貴重な歴史の教科書だと思います。私たちは何千万という中国と日本の人民の命と鮮血であがなった歴史の教訓を心に刻まなければなりません。中日両国は2度と戦争してはならず、お互いに友好平和が必須です。

### ■ 2度と口にするな！

映画の画面に導かれて、私の記憶はタイムトンネルを潜り抜け、もう一度60数年前に戻りました。私は1935年、中国黒竜江省湯原県に生まれました。子供の頃の記憶と「満州国」、「日本」はぴったり結びついている、と言ってもいいと思います。幼い頃、私の気持ちの中には「中国」という概念はなく、自分が中国人であるとさえ知らず、ただ自分は満州人であるということだけは知っていました。あるとき、どこから手に入れたのかわかりませんが「中国」という字の入った地図を見て父に聞いたことがあります。

「中国というのはどうしてこんなに大きいの？ 中国人ってどんな感じ？」父は言いました。「お前は中国人だ。中国は大きく、“満州国”は、もともと中国の一部なのだ」父は続けて、厳しい表情で言いました。「これからは2度とそんなことを口にするのじゃないぞ。もしも日本人に聞こえたら面倒なことになるからな」この時私はなんだかよくわからず、父の話がよく飲み込めませんでした。

私の故郷・湯原県は松花江沿いの、米も魚もとれる美しいところで、そこでとれる米は有名でした。しかし私の子供の頃の記憶では「満州人」は米のご飯を食べることを禁じられていて家の中に米をとっておくこともできませんでした。食用でも保存用でも、見つけられたら『経済犯』として重刑に処せられます。当時お米は『軍需品』とされ、日本人だけが食べていました。父たちは毎日、田んぼで辛い労働をしながら収穫した米は計算どおり日本人に渡しました。当時はそれを「出荷米」と言っていました。それで

も我が家で1, 2度は米のご飯を食べた記憶があります。その時、家族の茶碗にはホカホカの白米が盛られていた一方、テーブルの下にはそれぞれ橙色のとうもろこし飯を盛った茶碗を準備しておかなければなりません。大人たちは私たちに早く食べるよう促しながら、万一日本人が入ってきたときは、急いで米のご飯を隠し、とうもろこし飯を取り出すよう言いつけました。家族みんなで自分たちが作った米をびくびくしながら食べました。あのせっぱ詰まった気持ちと場面を、昨日のこのように、はっきり覚えていてます。

## ■ かぼちゃ売りの老婆

私の記憶の中では『日本開拓団』はかぼちゃと結びついています。その頃、私たちの家の近くの大通りで開拓団の日本人が野菜や果物を売っていました。あるとき母親が私を連れて日本の屋台で野菜を買ったことがありました。ひとりの優しいおばあさんが私たちのためにかぼちゃをひとつ選んでくれました。このかぼちゃはあまり大きくはなく、丸くて赤黄色で、外形から見ると土地のかぼちゃとは違いました。日本の老婆は、このかぼちゃの種は開拓団が日本から持ってきたもので、とてもうまいから買って帰って味を見てくれと熱心に勧めました。母はそのかぼちゃを買って帰りました。たしかに味は甘くて柔らかい。これが私が初めて食べた日本のかぼちゃでした。その後、私にせがまれて母は、何回か日本の老婆のところへかぼちゃを買いに行きました。現在も北京の市場でこの種の小さくて丸い日本のかぼちゃを見かけます。それを見るたび私は、あのかぼちゃ売りの日本の老婆のことを思い出します。60何年前、あのこぼれるような笑顔の日本の老婆と何千万の日本の農民が故郷を離れて、寒い東北の松花江流域で田畑を耕しましたが、彼らを恐ろしい悪夢が待っていようなどと、誰が知っていたでしょう？

## ■ 大通りで誰かが…

1945年8月、日本軍国主義が敗戦降伏した時、私は10歳でした。ある日、私は突然、大通りで誰かが「日本人が降参したぞ！ 日本人がみんな逃げ出したぞ」と叫ぶのを聞いたことを覚えています。私は急いでみんなについて一番近くの開拓団の村へ行きました。そこでは荒されて何も残されていず、日本人は一人もいませんでした。あとで聞いたところによると、開拓団の難民は敗戦の知らせを聞くとハルピンの方角へ逃げ始め、そこから帰国しようとしたが、逃げる途中、方正県で餓死したり凍死したりしたと言います。その時私と母は、あのかぼちゃ売りの老婆のことを考えました。彼女は平凡な日本の農民なのに、何の罪があってあの戦争の犠牲者にならなければならなかったのか。彼女は日夜思い続けた日本の郷里へ帰れたのだろうか。それとも白骨を満州の原野に撒き散らすことになったのだろうか。母が言いました。「彼女は日本の農民だよ、運が悪かったんだ！」日本の侵略者は中国の人民に甚大な災難と痛みを与え、最後には自分も最後の日を迎えました。そして30余万人の日本の農民は日本の侵略政策の犠牲になり、満蒙開拓団も永遠にその歴史を閉じたのです。

## ■ 公墓の担当者になる

1959年、私は大学卒業後、最初は北京で仕事をし、その後、黒竜江省政府外事弁公室領事僑務処日本処に転勤になりました。60年代の初め、方正県の日本人生存者が犠牲者の遺骨を発見、方正県政府はすぐこれを黒竜江省政府に報告。省政府外事弁公室の上層部は私を派遣してこの処理に当たらせました。天が定めた運ということかもしれません。この任務を与えられた時、私の頭の中にはまた、あのかぼちゃ売りの老婆の声と笑顔が浮かびました。私たちは検討し、処理方法を中央政府に提出しました。そして1ヶ月もしないうちに、中央政府のOKを得たのでした。私はこの目で陳毅副総理が私たちの申請を許可したのを見たとき、非常に感動しました。中国政府は開拓団の多くが日本の貧しい農民であり、日本の移民侵略戦争の道具にされたものだ。死者は日本の平民、百姓であり、人道主義で対応すべきだと考えたのです。同時に中日両国関係の長い将来と死者の家族の気持ちを考慮し中国政府は永久的な墓碑を建てることに決めたのです。

中央政府のOKは出たものの日本人公墓の建設には、さまざまな困難がともないました。まず中国人民の理解が得られるかどうかです。当時、中日両国はまだ外交関係を回復していませんでした。一部中国人の反日感情はまだ消えてはいませんでした。国際的には中国に対する経済封鎖が続き、建設の支援はストップ、専門技術者の引き上げという状況がありました。また中国は毎年、厳しい自然災害に見舞われ、国民経済と人民の生活は極度に困難な状況にありました。このような状況の中で、かつて戦争の敵国だった国の人の墓碑を建てるというのは、中国人民が受け入れるだろうか。次に日本人公墓の碑文はどう書いたらいいか。当時の中国の政治ムードに背かず、また日本人と中国人、そしてまたその子孫に受け入れられるにはどのようにしたらいいか。三つ目は運搬の難しさだった。石碑はすでに碑銘もできていたが、なかなか現場に運べない。理由は当時、松花江という水路が一本あるだけだが、ちょうど渇水期で、墓碑を載せる大型船が運航できない。何ヶ月も私たちは毎日、雨が降って松花江が増水する時を待ちました。

墓碑の建設を早め、質を保証するために幹部は私に石碑を選ぶことから、碑文の書、彫刻、輸送などの仕事をすべて私に関わるようにさせました。この日本人公墓をを建設する意義は、ただ日本の罪もない平民の記念碑であると同時に、また中日両国の平和に対する永久の願いであり、後世の人達が永遠に戦争をしてはならないことをあらわしていると思うのです。

## ■ 紅衛兵から公墓を守る

「方正地区日本人公墓」ができて2年あまり後、中国では「文化大革命」が始まりました。当然のことながら、公墓も江衛兵の襲撃を受けました。黒龍江省政府はこの公墓を守ることを決め、私に黒龍江省政府の指示を方正県政府に伝えさせました。指示の内容はおおよそ次のようなものです。「この公墓は中央政府が承認して建てたものである。埋葬されているのは日本の平民である。誰であれ、何派であれ、これを破壊してはならな

い」これと同時に、公安部門が実際に監督し、省政府は私を方正に派遣して実際の状況を視察させました。そしてさらにあらためてお金を支出し、お墓の周りを柵で囲みました。これを見て紅衛兵たちはさらに手を出すわけには行かないことを知り、引き揚げざるを得ませんでした。黒竜江省政府と方正県政府がとった措置がタイムリーだったことと、現地方正の大多数の中国人の理解があったことによって、日本人公墓は「文化大革命」という凶暴な嵐の中でも無傷で保存されました。これはあの時代では稀有のことでした。

## ■ 歴史の過去から未来へ

「方正地区日本人公墓」はひとつの歴史記念碑であると同時に、また永久的な警告の碑でもあります。その後、この近くには次々と「麻山地区日本人公墓」、「中国養父母公墓」そして日本の水稲専門家「藤原長作先生の墓」そして「中日友好園林」もできて、中日両国人民が幾世代の後世までも友好を続けることを祈念しています。47年間、このお墓は国内外の広汎な人々の注目するところとなりました。千を数える日本の友人が訪ねてきて参拝し、同胞を偲び、中国に対する感謝の気持ちを表してきました。私はここを訪ねる中国人、日本人がこの墓碑に向かったとき、誰もが胸が熱くなり、黙禱をささげ、絶対もう2度と戦争の歴史を繰り返さないと誓うと信じています。

嬉しいことに、大類善啓、奥村正雄、金丸千尋といった日本の有識者の長期にわたる、たゆまぬ努力によって、いま、「残留孤児問題」と「方正地区日本人公墓」はついに日本政府の配慮にまでこぎつけました。日本の駐中国外交官が次から次と公墓を参拝し中国に対する謝意を述べています。また日本政府は墓地の管理費用の一部を負担することを決めました。こうした日本の行動は中日両国の長い将来にわたる友好の促進に必ずや積極的な作用を及ぼすものと私は信じますし、嬉しさを禁じえません。

(奥村正雄訳)

(ちょう・きしん：プロフィールは、巻頭の趙さんの原稿、「あの歴史に立ち会う」のところに詳しく紹介してあります。ご参照ください)